

神宮内苑・外苑の歴史に立脚しつつ、日本の「新しい伝統」を創ります

日本の伝統的文化を現代の技術によって新しい形として表現する方策

1 神宮の歴史を継承した「新しい伝統」の創出

- 明治神宮は近代都市をめざす東京の中に伝統思想に基づく新しい聖地を創ろうとしたものです。それは深い森におおわれた内苑の自然と、そこから外に向けて力の噴出する外苑という二重構造をもっており、内苑と外苑が一体になって人間にとって大切な価値を守る「結界」をなしています。
- 私たちはそのような明治神宮の思想を重んじながら、新しい技術を結集して、100年の未来に向かう「新しい伝統」を創出していかねばならないと考えます。



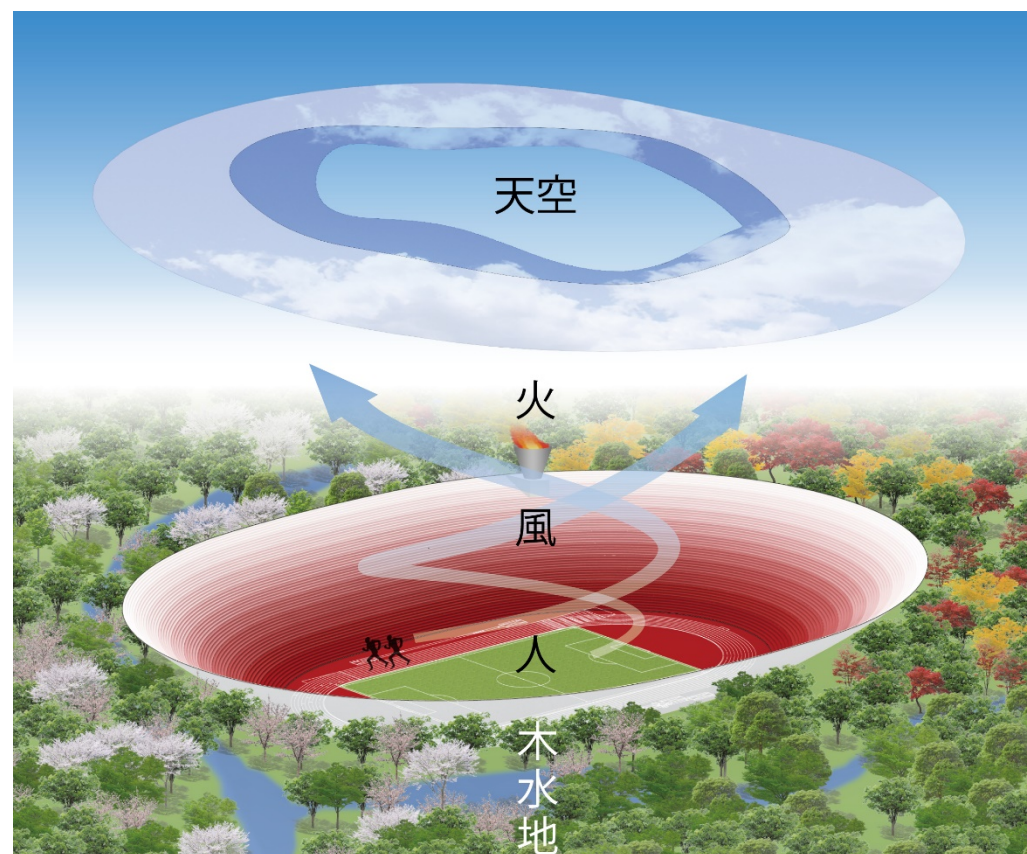
力の顕現する明るい森



社を隠蔽する深い森

2 大地のエネルギーが天空に向かって上昇する祝祭の場

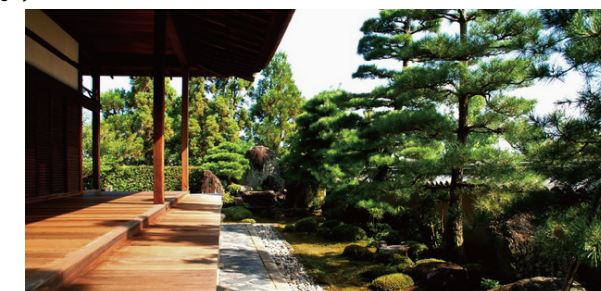
- 純木製の列柱に囲まれたスタジアムは縄文的な力強い祝祭の場を生みます。
- 宇宙を構成する諸要素とも言うべき地、水、木、火、天空などによって構成されるスタジアムは、アスリートの根源的な力を引き出し、観客を興奮の坩堝へと誘います。



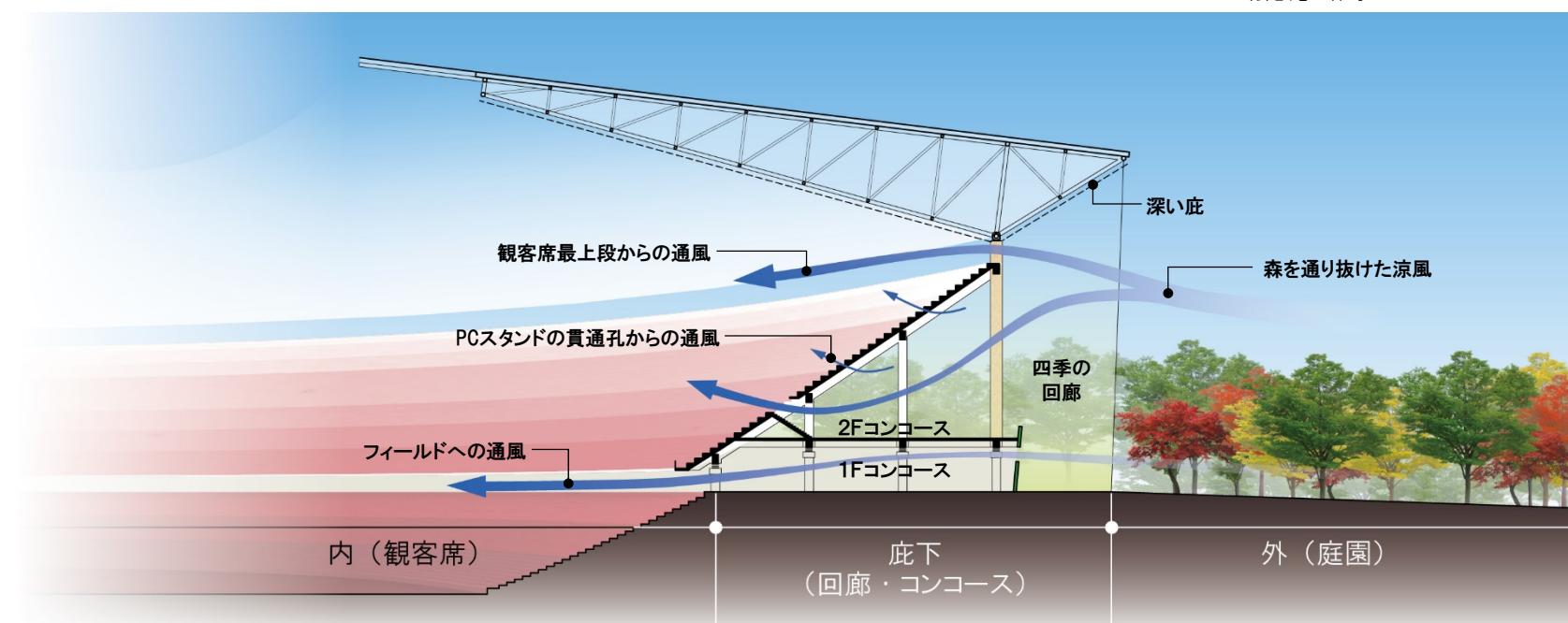
内苑-外苑の二重構造を踏襲しつつ、21世紀にふさわしい「新しい伝統」を創ります

3 柱の自然とスタジアムが相互貫入する日本らしい空間構成

- 日本の伝統的建築は、庇や縁側を介して庭園に連続する構成を重んじてきました。
- 新しいスタジアムも大きな庇と「四季の回廊」によって四季折々の自然を映し出す柱に開き、内外の相互貫入を実現します。
- 器状のスタンドの形状及び屋根との空隙によって、森を通過した涼風を深く吸い込み快適な内部環境をつくります。自然を取り込んだ日本の伝統的空間構成の新しいモデルを生み出します。
- 縁側のような伝統的空間構成と最先端のシミュレーションにより、「呼吸するスタジアム」を実現します。

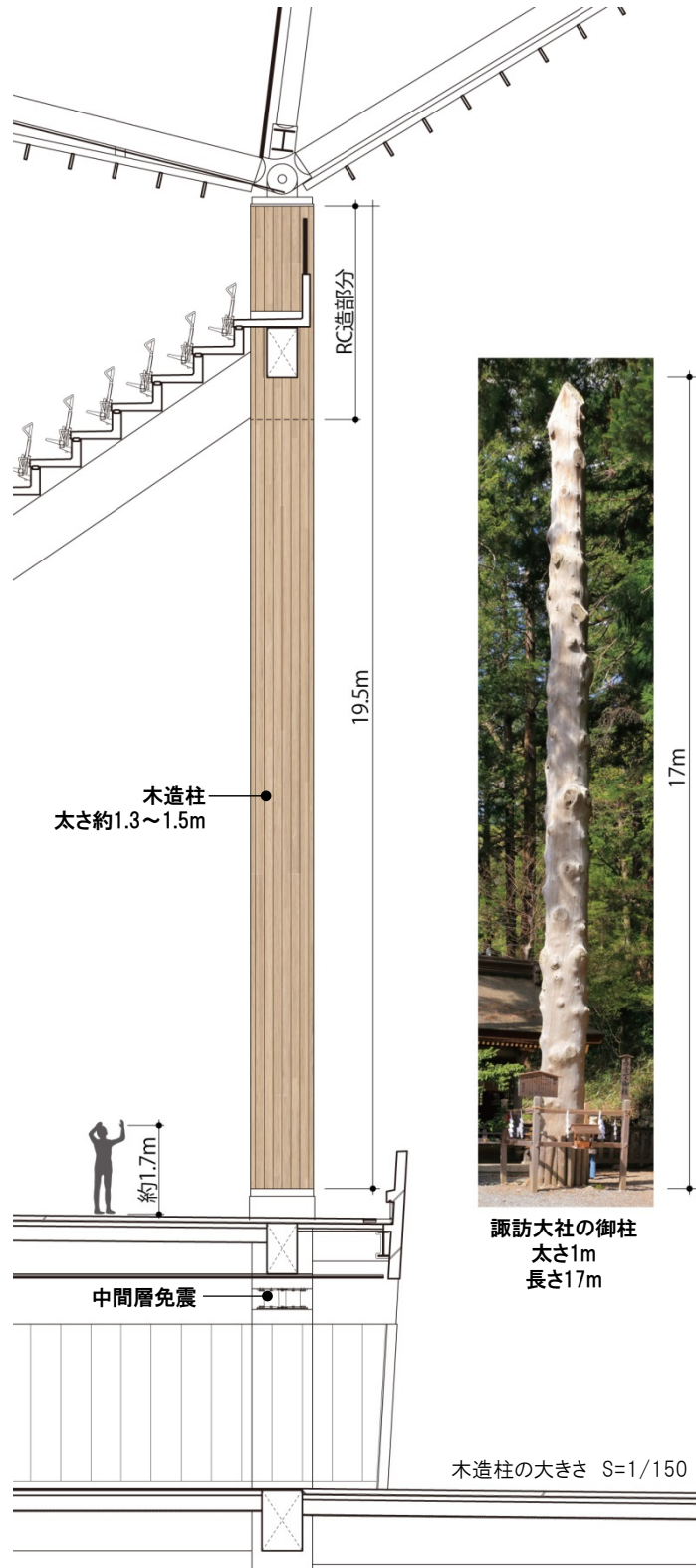


副恩庵一休寺



天空に浮遊する屋根を72本の純木製の柱で支えます

日本の気候・風土、伝統を踏まえた木材利用の方策



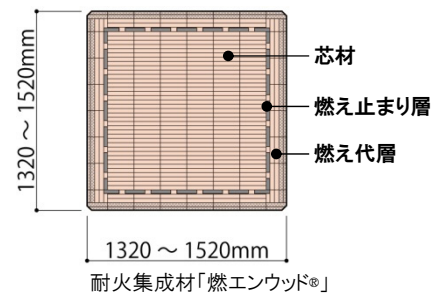
1 スタジアムを支える72本の純木製の柱

- スタンド最外周の72本の柱は、スタンド・屋根を支える最も重要な柱です。伝統的な木造家屋でいえば、一本一本が大黒柱というべき存在です。
- 72本の大黒柱は純国産カラマツによる安定した品質の集成材でつくられた木造柱とします。外観に現れる環状に配置される木列柱は浮遊する屋根とのコントラストを生み出し、人々に強い印象を与えます。

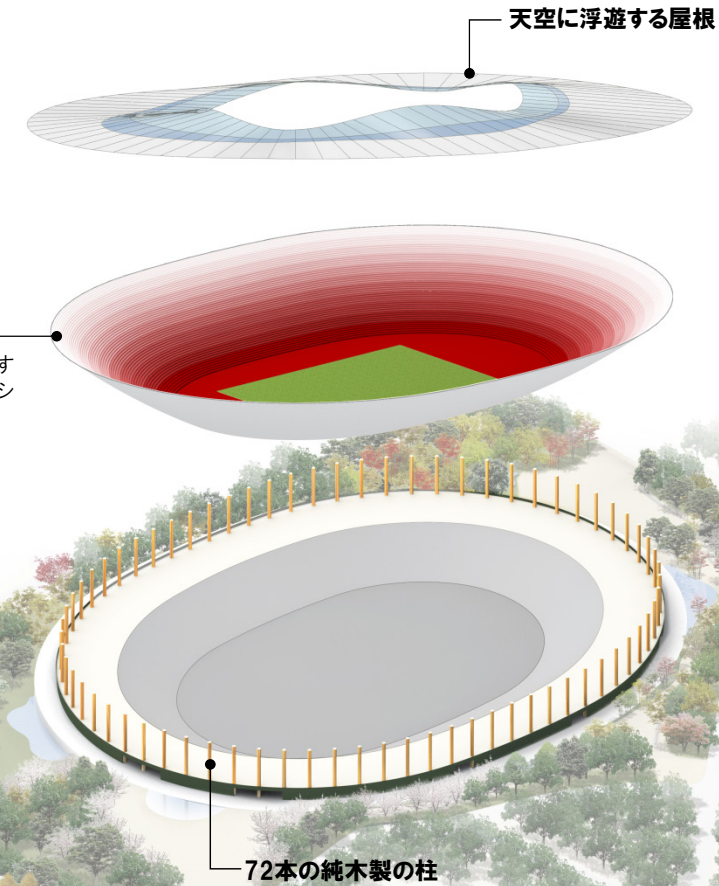
白磁の器のようなスタンド
スタンドの形状をそのまま外観に現すことで、日本の美しい盃を思わせるシンプルなシルエットをつくります。

2 最先端技術を活用した木柱の実現

- 日本伝統の木造技術を活かした最新の技術によって、地震や火災などの災害に対する安全性を確保します。また、自然素材を長く使い続けるため、風雨・日射に配慮した日本の風土に合った活用を行います。
- 架構に用いる耐火集成材「燃エンウッド®」は芯材を国産カラマツとし、燃え止まり層にカラマツ+モルタル、燃え代層にカラマツを使用した1時間耐火大臣認定取得材です。
▶ 37/45

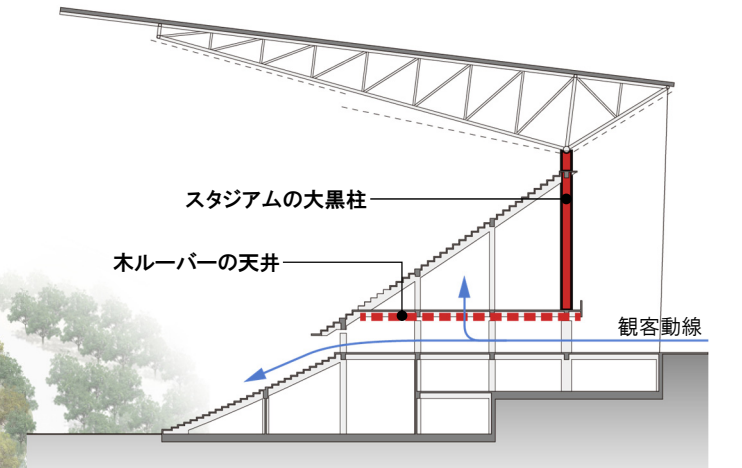


耐火集成材「燃エンウッド®」

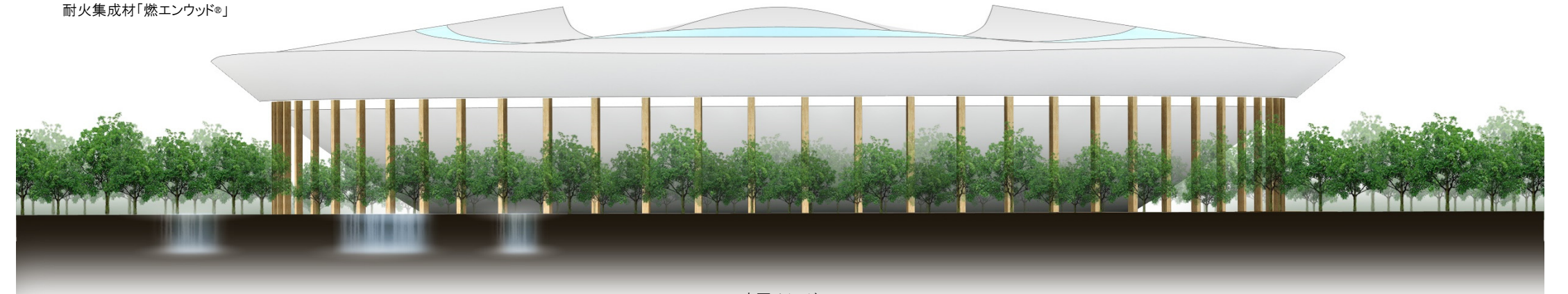


3 人々を温かく招き入れる木製天井

- スタジアムに入って最初の空間である1階コンコースの天井に木製のルーバーを使用し、人々を温かく招き入れる空間とします。



エントランスイメージ



祝祭空間を象徴する木柱

日本では伝統的に「柱を立てる」行為に象徴的な意味を見出してきました。縄文時代に形成された祭祀の空間には円を描くように巨木列を配置した遺跡が見られます。また、諏訪大社の御柱祭に代表されるように、柱は神域を表すシンボルの意味を担ってきました。力強い巨木で支えることで日本らしい祝祭空間をつくります。



三内丸山遺跡(再現)



真脇遺跡の環状木柱列(再現)



出雲大社の三本柱(再現)



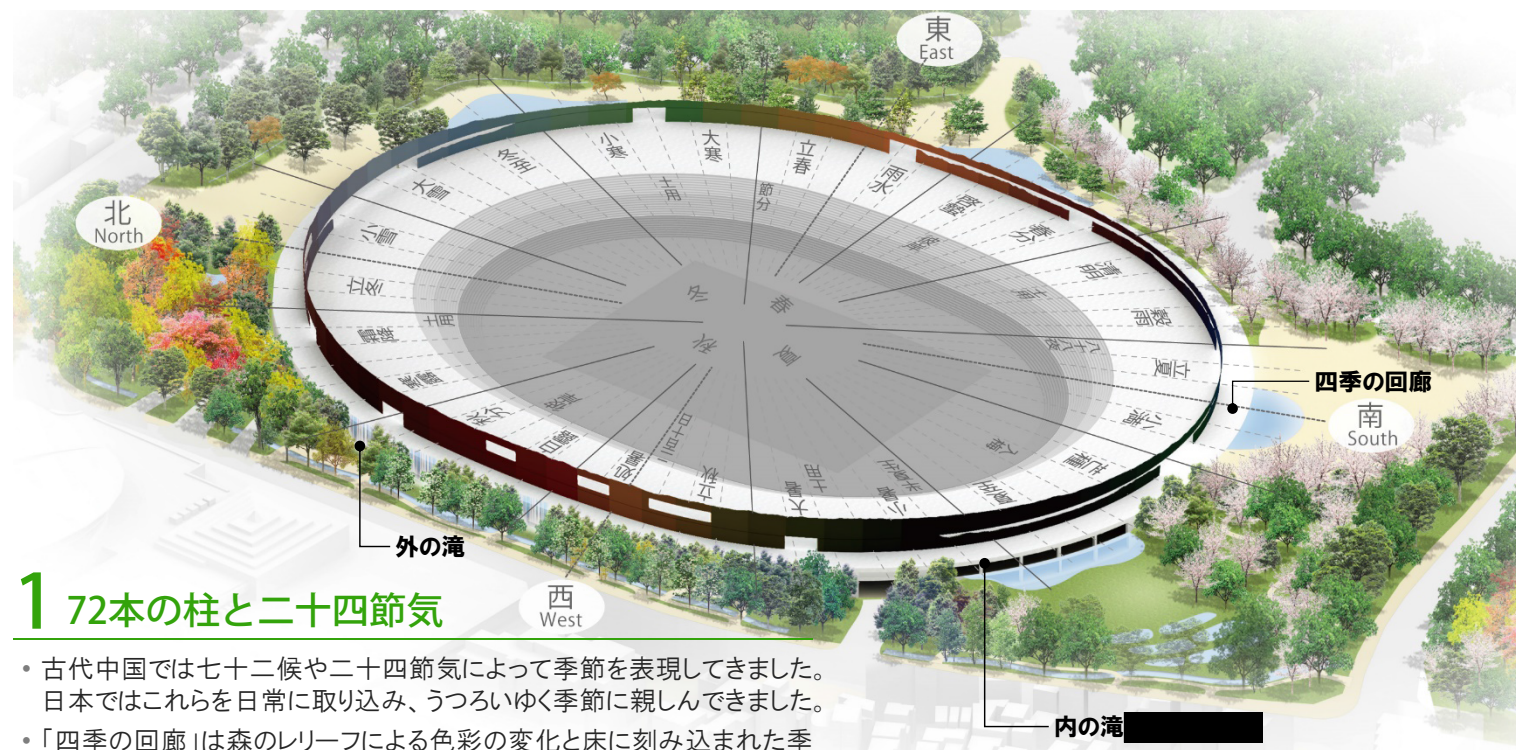
諏訪大社 御柱



唐招提寺金堂の列柱空間

季節のうつろいを体感できる「四季の回廊」とアートワークによって外苑の杜とスタジアム内を結びます

日本の伝統的文化を現代の技術によって新しい形として表現する方策



1 72本の柱と二十四節気

- 古代中国では七十二候や二十四節気によって季節を表現してきました。日本ではこれらを日常に取り込み、うつろいゆく季節に親しんできました。
- 「四季の回廊」は森のレリーフによる色彩の変化と床に刻み込まれた季語によって、親しみやすく分かりやすい位置情報となります。

2 季節のうつろいを色彩とレリーフで表現する「四季の回廊」の壁面

- 全長850mの「四季の回廊」は、神宮の杜とスタジアム内部を結ぶ縁側のような空間です。回廊の壁面には、「神宮の杜」をイメージしたプレキャストコンクリートのレリーフを設置します。▶43/45
- レリーフとして浮かび上がる木々の集まりは、日本の美しい山々と神宮の深い森の生命を想起させます。季節のうつろいを72種類の色彩のループとして表現することにより、周囲の森や自然に開かれた場所になります。



3 旧国立競技場の記憶を繋ぐモニュメント

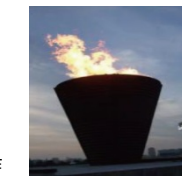
- 出陣学徒の碑、数々の壁画、聖火台など、解体されたスタジアムやこの場所の記憶を留めるものをスタジアムの内外に点在させ、神宮の歴史を継承します。▶43/45



「出陣学徒の碑」



「野見宿禰像」
長谷川路可作



1964年大会「聖火台」
鈴木万之助作
出展：日本スポーツ振興センター

4 季節のうつろいと共に変化する日本のあかり

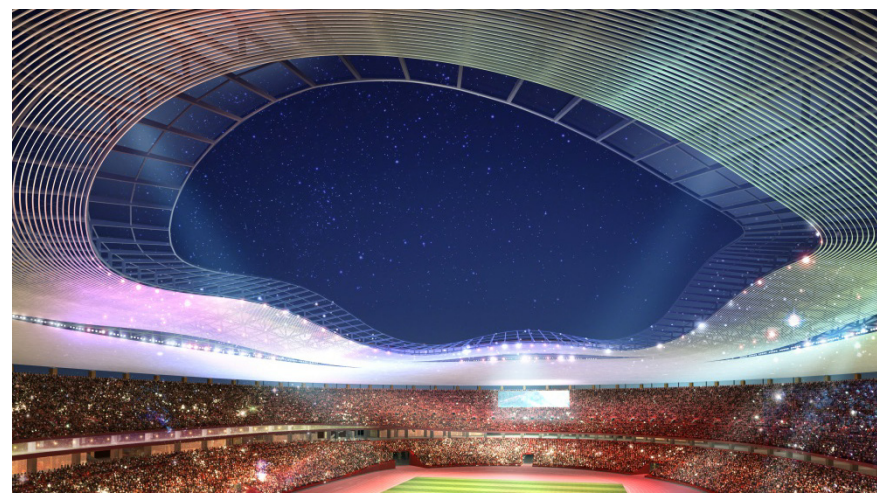
- 雲、夕焼け、虹など自然と同化する優しいあかりをつくります。
- 建物全体の光を制御するコントロール技術によって、季節や自然現象に呼応したあかりをつくります。
- 木柱側面を照射し輪郭を際立たせ力強い祝祭の場を演出します。

5 大地と宇宙を結ぶ滝が再現する日本の風景

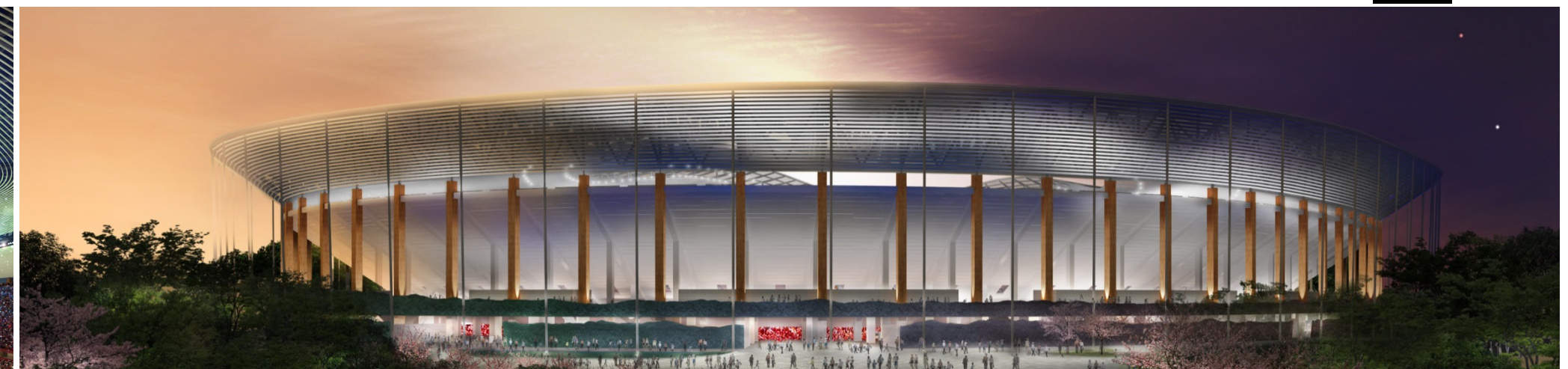
- 外苑西通りの滝と室内に設けるアート作品としての滝が、豊かな風景をつくります。
- 壁面を飾るアーティストによる内部の滝が涼感を呼び覚まします。
- 漆喰ペーパーとJETプリンターで製作する内部の滝は、耐久性に優れ、メンテナンスを容易にします。▶43/45



内の滝 イメージ©千住博



演出照明による光：沸き立つ雲、ゆっくりと流れる雲、人々と呼応する雲、四季折々の雲、朝日/夕焼けの雲、虹、夜虹オーロラなどスタジアムの内外で自然と呼応したあかりをつくります



照明イメージ©MOTOKO ISHII LIGHTING DESIGN